神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

In honour of professor Watanabe Yuko

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2003-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男, Okamoto, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/846

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

渡邉先生について

岡　本　崇　男

渡邉先生を多少とも知っている人は，渡邉先生をどのように呼ぶかによって二つのグループに分類される。その一つは，「安井さん」「安井先生」と呼ぶ人々であって，外大着任以前から渡邉先生と交流があり，二十世紀ロシア文学の研究者であり翻訳家としての安井侑子を知っている。中には気安く「侑子さん」と呼ぶ方もいらっしゃるようである。一方，「渡邉さん」「渡邉先生」と呼ぶのは外大着任以降の渡邉侑子先生しか知らない教員や教え子たちということになる。理想を言えば，いずれのグループにも属している者が先生の想い出を語った方が良いのであるが，残念なことにそのような適任者がロシア学科の教員にはいない。わたしのように外大教員としての渡邉先生しか知らない者が書く以上，話題はおのずと1985年以降のことに限られる。

＊　＊　＊

1960年代前半まで神戸外大に在籍する学生はほとんど男子であったらしいのだが，現在では学生の七割近くを女子が占めている。この状況はわたしがこの大学に入学した1970年代前半からあまり変わっていない。一方，専任教員に女性は一人もいなかったようである。ごく僅かながら非常勤教員あるいはモスクワ大学から派遣される交換教員に女性がいる程度であった。そして1980年代になるともはやこれは日本の大学としても珍しい現象になっていた。そこに登場したのが渡邉先生であって，「神戸外大初の女性専任教員」として1985年に着任された。格付けは助教授であった。わたしはその前年に助手

として採用されていたので新たな上司を迎えることになった。

当時のロシア学科代表であった天野和男先生（現名誉教授）は渡邉先生にたいして予めいくつかのことを期待されていたように思われる。それは先ず，男ばかりの教授会の雰囲気を少しでも変えたいということ。次に，特に女子の比率が多いロシア学科の学生が気軽に相談できる人物であってほしいということ。それから，青春時代の七年間をモスクワで過ごした人ならではのロシア語運用能力であろうか。そして，これらの期待は比較的早く叶えられることになった。渡邉先生以降，女性教員の数は少しづつ増加し，現在では全体の約二割を占めるにいたっている。また，ご本人が元来社交的な性格の持ち主であるため，多くの学生に気軽に声をかけたり，ゼミの学生を中心としてご自宅に招いたりして，学校の内外で学生に係わってこられた。このためか，多くの学生は渡邉先生が授業に遅刻することがあっても，あるいは（誰にでもあり得ることだが）記憶違いのため学生に対する説明に間違いがあっても，無条件に許してしまっていた。学生曰く，「なぜか許してしまうのです」ということで，まことにうらやましい限りである。しかし，これは個性のなせる業であって，そのような個性を持ち合わせていない人間が何を言っても仕方のないことであろう。それにおそらく学生のほうにも先生のロシア語運用能力に対する信頼があったからこそ「何でも許せた」のかもしれない。天野先生の目論見は達成されたのであった。

＊　＊　＊

ところで，渡邉先生と17年間同僚として働いていて大いに感心したことが一つある。

先生が着任された翌年に外大は六甲を離れて西区にある現在のキャンパスに移転し，その四年後に先生は教授に昇任された。しかし，そのころより少し体調を崩されて，ときに思うように活動できないことがあり苦しまれていた。そうした頃の，おそらく10年ほど前のことだと記憶しているのだが，先

生の講読の授業を途中で引き継いだことがある。四年生の専攻科目であり，チェーホフの短編を訳読することになっていた。わたし自身第二外国語の授業では文学作品を教材にすることはあったのだが，自分は語学系の人間であるという意識が先に立っていたのと，文学の専門家の授業を引き受けて学生に技量を比較されてはかなわないという思いから，教材を変えても良いかと受講生に聞いてみた。学生は「何でも良い」と言ってくれたのだが，学期の途中であり，もうすでにいくつか短編小説を読んでいる。そこで，やはりすでに配布されている小説を読んで，それが終われば，引き続きチェーホフの短編を読むことにした。毎回の予習に相当な時間をかけたことは言うまでもない。

そして，この授業を進めていく途中にふと疑問が浮かんだ。どうしてチェーホフなのかと。わたしのイメージにある文学の先生が学生に与える教材というのは，自分が専門にしている作家や作品ジャンルのテキストか，あるいはそれらの作品に関係する評論であることが多いような気がする。しかし，チェーホフの作品はロシア文学の典型的な古典であって，渡邉先生が得意とされる二十世紀文学とは相当に傾向を異にしている。社交的ではあるものの，好き嫌いもはっきりしている人であるという印象を先生にたいして持っていたので，教材の選択に関しては古典中心という姿勢を見て，感心した次第である。プーシキンもチェーホフもトルストイも知らずに卒業してしまう学生は，やはり可哀相であるし，授業で扱わずとも自主的に読めるように教員も働きかけるべきであろう。

＊　＊　＊

定年まであと五年を残す頃から先生の体調も良好になったように見受けられた。いつのころからか，週に二度は共同研究室で何人かのスタッフが集まって昼食を取りながら半分ロシア語，半分日本語でお喋りしながら短い休憩時間を過ごすのが習慣になっていたのだが，渡邉先生も月曜日に参加され，ほ

ぼ皆勤であった。この間，先生は特に学生の派遣留学に力を入れられ，何度か学科代表として学長に直談判されていたようである。阪神大震災の影響で大学の予算が削減され続ける中で，新たな事業を神戸市に対して要求することは最初から無理だろうと，わたしなら諦めていたところであるが，渡邉先生はこの点に関して極めて頑固であり，結局全学の学生を対象とした派遣留学制度が発足することとなった。残ったわれわれは学生の学習意欲を高めるためにも，この制度を維持せねばならない。

＊　＊　＊

渡邉先生は退職後神戸の自宅を引き払われ，現在はご主人である渡邉雅司先生（東京外国語大学教授）といっしょに鎌倉にお住まいである。ご本人から伺ったところ，お宅に辿り着く前に百八段の石段を登らなくてはならないので，初めのうち体を壊されたそうであるが，秋からはそれにも慣れつつあり，健康も回復されたということである。今年の十一月以降，二度神戸に立ち寄られ，一度目よりも二度目のほうが顔色も良くなっていた。それにしても「百八段」というのは意味深長である。もしかすると，わたしの聞き間違いでもう少し多かったかもしれないのだが，できればこのままにしておきたい。煩悩のない人生は（わたしのイメージする）文学研究者には似つかわしくないのだから。